科技高 いきもの記

Vol.20 2021.2.9

佐藤龍平

早春のガマ合戦
アズマヒキガエル

↑巨大なウシガエルをメスだと勘違いして後ろから抱き着くヒキガエルのオス（右）。左からもう１匹のオスが現れて無理やり割って入ろうとしている。

↑争う２匹のヒキガエルのオス。しがみつきながら片手で相手を叩き始めた。ガマ合戦の始まりだ。ウシガエルは２匹にヘッドロックされたままのけぞってしまった。実に迷惑そうだ…。

↑ウシガエルの派手な腹の模様。また、目を見ると半透明の「瞬膜」が閉じているのが分かる。カエルはまぶたの内側に、下から上に閉じるこの「第二のまぶた」がある。

↑岩陰から出てきたヒキガエルのオス。この日は合計４匹のオスが続々と現れた。

立春（２月４日）を過ぎ、体育館の横の梅の花が咲き始め、春の訪れを感じ始める季節になってきた。そろそろカエルたちも冬眠から覚めて活動し始めるころかと思い、猿江公園の池をチェックしていた。

２月７日は東京の最高気温が16℃になり、２月としては非常に暖かい日であった。翌２月８日の夜に池をのぞいてみると、案の定、**１匹のヒキガエルが冬眠から覚めて泳ぎ回っていた。**ヒキガエルはまずオスたちが活動し始めてメスを待つ。このオスガエルを観察していると、突如、横からにゅっと巨大な影が現れた。**ウシガエルだ！**かなりデカいオスだ！20cm近くありそうだ。あまりの巨大さに、思わず「うわっ！」と声が出てしまった。

このウシガエルが登場すると、待ってましたと言わんばかりにさっきのヒキガエルのオスが寄っていき、背中から抱きついた。これは**「包接」という繁殖行動**だ。いやでも待って！それ別種だし、オス同士だぞ！とツッコみたくなるが、ヒキガエルは完全にメスだと勘違いして抱きついてしまっている。しばらく見ていると、どこからともなく**もう１匹のオスが近づいてきて争いが始まった。**２匹とも、もみくちゃになりながらも片手でウシガエルをつかみながら、もう一方の手でライバルのオスを払いのけるように叩き始めた。オスたちの攻防の最中、されるがままのウシガエルはただじっとしている。首を２匹のオスに絞められているので、なんだか苦しそうだ。争いが激しくなると、みんなでひっくり返ってお腹が上になってしまった。しばらく攻防を続け、最初にしがみついてきた方のオス（写真右側）が最後の一撃を放つと、もう一方のオスは諦めて逃げ出していった。勝負ありだ。…うーん、でも残念！せっかく勝ったはいいけど、それはメスじゃないんだよなぁ。本人たちは必死なんだけど、何だか間抜けで笑ってしまう。

ヒキガエルは繁殖期間が短く（数日～１週間程度）、まだ寒さの残る早春の夜に、狭い範囲で一斉に交尾・産卵を行う。多数の個体が繁殖のために密集するので、必然的に激しい争いが起こり、古くから**「ガマ合戦（カエル合戦）」**などと呼ばれて親しまれている。オスは**動くものに反応してとにかくすぐに抱きつく**ので、このようなミスマッチが起きることもあるのだとか。一方で、トノサマガエルやアマガエルなどは繁殖期間が長く、あまり密集しないので、**大きな声で鳴いてメスを呼ぶ。**のどの部分を大きく膨らませて鳴くのはこちらのタイプのカエルだ。

この先、１～２週間もすればこの池はオタマジャクシだらけになるだろう。引き続き、我々にとって最も身近なこのカエルたちの成長を見守っていこうと思う。